

## レンダラーとしての復興支援

3.11の2011年、JARAIは大変な年を迎えていた。前年の設立30周年記念事業に引き続き、UIA関連イベントとしての国際建築イラストレーション展を開催予定だったのだ。

2大イベントを終えた2012年、ようやく平年のパース展を開催するにあたり「震災復興関連の作品コーナーを設けてはどうか」という意見が出た。しかしそれは実現できなかった。我々の仕事はプロジェクトの内容により公に出来ない事が多いからだ。

そこで「ポストカードのチャリティ販売」という企画に落ち着いたのだが、本当は「計画をビジュアル化する職能」を通じて復興やまちづくりなど社会に貢献できる職業だということを知ってもらいたい。

そんなわけで今回は、多数の計画に関わってきたという齋藤氏に執筆をお願いした。

3.11東北大震災発生約50日後、宮城県石巻に入りました。東北自動車道が復旧し、一般車両もようやく被災地入りが可能になった頃です。

どうしてもこの目で確認しておきたかったこの天変地異。行先を決めて行ったわけでもないのですが、東北道から仙台北部道路を経て三陸自動車道を北上したころ、気がつけば前後左右、災害支援に向かう自衛隊のトラック車列に挟まれていました。

誘導されるように石巻市街地に着くと、いままで見たことのない異様な世界がありました。道路際には仮埋葬されたのだろうか、たくさんの墓標。そして町中に漂う腐乱した魚から発せられるような生臭い異臭。津波で破壊されつくした瓦礫の街は果てしなく広く、災害支援要員はあまりに少ない。

だれもない住居跡にはポツと一人、100m程遠くの住居跡にもポツと一人、長い棹のようなものをもって瓦礫と土砂に埋もれた遺体を黙々と捜す自衛隊員の姿が今でも目に焼き付いています。

大震災以前から土木系コンサルタントとの付き合いがあり、地震や津波と向き合う仕事は少なからずありました。コンサルタントの仕事は何十年あるいは何百年に1回起こりうる大洪水や大地震や大津波を想定し、それに耐えうる構造物をつくる。そして未来永劫変わらないような「輝かしい完成予想図」をクライアントに提示するのは土木も建築も一緒かもしれません。

しかし形あるものはいつか必ず壊れるのです。



①石巻市街地の様子 筆者撮影

### 「崩壊シーンを描く」

10年程前に、ビルの崩壊状況を描くという珍しい依頼が某社からありました。当時も首都直下型地震が起こる可能性を指摘されていたので、建物がどの程度の被害を受けるかをビジュアル化し、被災後の行動指針をつくり、防災教育に役立てたいという狙いからでした。某社は多くの支社を有し、その建設年代はまちまちでした。もちろん新耐震設計法以前に出来た建物も多く、一部は耐震改修しているものの、多くが手つかずで大地震に対して無防備だったのです。

構造設計の専門家と打ち合わせを重ねながら、ガラスや外壁の落下シーン、柱が崩壊し鉄筋が剥き出しになったシーン、地下の杭が折れて建物の一部が沈下したシーン等、さまざまな状況をビジュアル化する。「あ

まりリアルに描いてはダメ、しかしリアリティは出したい」という難しい依頼でしたが、現実を直視した先駆的な試みでした。

津波関連では、数年前に某研究団体から、流された漁船や漂流物を海岸際でくい止め街中の被害を最低限に抑えるという主旨をイメージ化する依頼を受けました。横転して壊れた漁船や逆さになって海面に浮いている自家用車。カタログやスペックを確認し壊れやすいところを想定しながら、少しオーバー気味に描いたつもりでしたが。

3.11大津波の破壊力と被災状況の現実私の想像力をはるかに超えていました。

### 「復興イメージを描く」

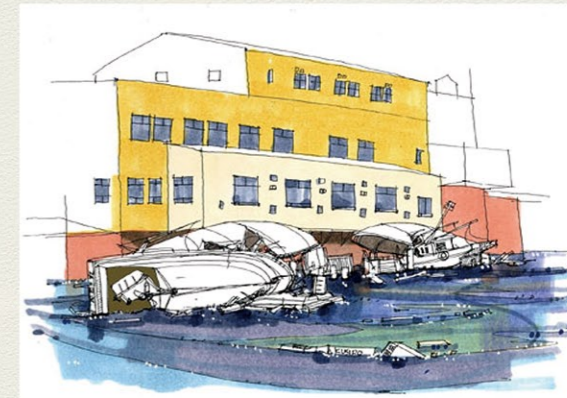
昨年の夏、津波被害を受けた岩手県三陸沿岸地域で震災の教訓を「次世代のまちづくりに継承する」という目的で、検討委員会がまとめた「津波伝承まちづくりガイドライン」。その中のキーワードを「スケッチパース」で表現するという機会をいただきました。

勿論図面はなく、委員の先生の発することばや奥に見え隠れする思い、そして岩手県の希望を受け止め咀嚼してスケッチパースに描く。ラフな復興イメージを双方で確認しあいながら行う作業でした。被災地の生々しいシーンはお互いに現地で見ても感じ取っている筈です。そんな思いが仕事を大きく後押ししてくれたように思えます。

近年東京湾北部直下型地震の被害規模や東海・東南海・南海トラフの海溝型地震による大津波高が大きく見直されました。大災害が切迫しています。私たちや大切な家族、そして暮らしている街に容赦なく襲いかかる甚大な被災状況を、的確にイメージしているのでしょうか。

「崩壊した未来予想図」の発注を受けることはまだまだ少ないかもしれませんが、しかしながら完成予想図でイメージを形に表現する多くの経験を積んできた私たちです。地球的規模でプレートが移動し、日本列島の下に沈み込み。大地震と大津波が繰り返り起こることは歴史が証明しています。これまでに作り続けた多くのインフラや建築物が崩壊する災害の現実を表現し、警鐘を鳴らすこともレンダラーとしての役割ではないでしょうか。

図版③～⑦  
「津波伝承まちづくりガイドライン」から  
岩手県復興局  
津波伝承まちづくり検討委員会  
エイト日本技術開発



②漂流物をくいとめる



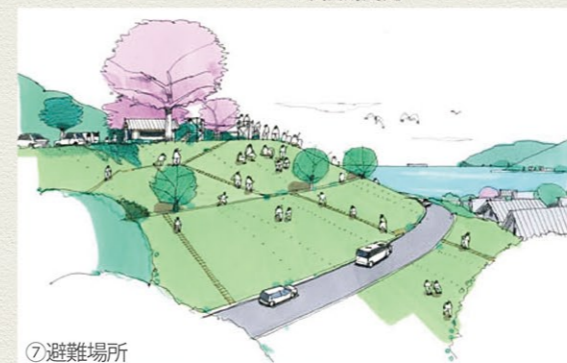
③復興後の全体イメージ



④高台住宅



⑤メモリアルパーク



⑦避難場所



⑥市街地復興



齋藤正樹 さいとうまさき  
武蔵野美術大学 工芸工業デザイン科卒  
(株)ディアアソシエイツ主宰